



して描かれる。





この町に住む人が思うまちの姿を目指して具現化した設計提案である。

拡張した石の風景は、宮窪の新たな景色となって来る人に力強い記憶と







大島でお世話になっていた地元の方にこの設計提案のためにドローンで撮影していただいた現在の敷地のようす

1. 私の問題意識と地域の問題意識

現地プロジェクトを通して、現地の石屋の方々とともに石 積の施工技術を体験し、私は彼らの地域資産への誇りに 共感すると同時に、存続の危機にあるそれらのものを守 りたいと思った。現役の採石場がある大島宮窪町は周囲 の島々とはその景観が大きく異なる。昔からある風景、 城壁と見間違うほどの擁壁を持つ住宅や巨大な石垣があ

合計5 回にわたる大鳥での現地訪問を行ってき た。

【現地での調査】

2016年9月13日から2016年9月14日(現地プロジェクト敷地と石丁場見学) 2017年4月29日から2017年4月30日 (現地プロジェクト、敷地調査) 2017年8月29日から2017年8月30日 (現地プロジェクトの実験、制作) 2018年6月26日から2018年6月27日 (敷地周辺の敷地調査) 2018年8月29日から2018年9月1日 (現地プロジェクト、敷地周辺の調査)

【ヒアリング調査】

- ・現地 NPO 法人「能島の里」へのヒアリング調査 1(大島石の現状、特徴など)
- ・現地 NPO 法人「能島の里」へのヒアリング調査 2 (敷地周辺の歴史など)



この現地訪問を経てこの町にあるもの、この町の 人々の思いを知ることができた。村上海賊のいた、

ここにしかない石積の風景に建築的可 能性を見出す

拡張する石の風景

記憶に残る伊予大島宮窪

研究室活動で2年半にわたり通った愛媛県今治市 大島宮窪町。活動中に「ここをどうしたら良いと思 うか」と尋ねられた町内のある場所に、大島石によ る建築を展開した。

現地プロジェクトを通して、現地の石屋の方々とと もに石積の施工技術を体験し、私は彼らの地域資 産への誇りに共感すると同時に、存続の危機にあ るそれらのものを守りたいと思った。石の建築の 可能性を求め、現代建築も含め、調査、分析した が、最終的にたどり着いたのはここ大島に根付く 石積技術であった。現役の採石場がある大島宮窪 町は周囲の島々とはその景観が大きく異なる。昔 からある風景、城壁と見間違うほどの擁壁を持つ 住宅や巨大な石垣。



記憶として描かれる。

敷地周辺の道沿いの石積



敷地周辺のお寿司屋の擁壁

この提案では、この石の風景を拡張するように石積に機

能と造形を与え設計した。石積のランドスケープはうね

く広がりを感じさせる。見え隠れする風景と一体化する

建築、建築自体が風景の一部となり、訪れた人は、巡り

歩く中で内外の境界なく宮窪の風景の中を歩く。すでに

ある魚市場、和船倉庫、博物館、集会所の機能は保ちつ

つ、コテージ、和船カフェ、石風呂を備えたシンボルの塔

を新たに設計した。存在感のある素材である大島石は大

島の力強さと根付く文化の象徴として、誇りをもってこの

町の人に技術と共に守っていってもらいたい。拡張した 石の風景は、宮窪の新たな景色となって来る人に力強い

るように流れ、そのまま建築化していき、内と外の境界な



採石場の上の巨大な石積



温潮の潮流



村上海賊の歴史



水軍レース



大島石の石切場

この宮窪町は、面積7,892,094 ㎡、人口総数2,292 人、世帯総数840世帯の町で、今治と福山を繋ぐしまな み 海 道 の、今 治 か ら 数 えて 1 つ 目 の 島 に あ たる。サイクリ ストや村上海賊の歴史好きが訪れる。



採掘量年間40万 t



この宮窪の海は瀬戸内随一の潮流・渦潮や和船の 技術、和船レース、荒々しい岩肌の現役の採石場な どの地域資産がある。またこれらを活用し、若い人 や観光客に島に来てほしいという人々の思いに触れ

主要産業である高級墓石として出荷される大島石 が、採掘量年間40万トンのうち95%は埋め戻して いて、地域の方々はその現状を模索しているという ことを知り、私は石を利用した建築の可能性を考え るようになった。





















2. 石建築についての文献調査

まず、建築雑誌より、263の石建築事例を参照した。調査対象は建築雑誌「新建築」「住宅特集」「A+U」の 各2000年1月号から2018年7月号のうち37冊を除く、632冊である。これより263の石建築事例を参照し代表的な38事 例を個別に分析した。また、私は建築の根源的なところや歴史の古くて新しいものに気づき、再解釈して生まれる造形に関心が ある。石による構築物に対する人びとの感覚や感情も踏まえて、提案する必要があると考え、石建築の歴史を調査した。



まず、建築雑誌より、263の石建築事 例を参昭した。

また、石による構築物に対する人びと の感覚や感情も踏まえて、提案する必要 があると考え、石建築の歴史を調査した。 その中で石場建てという方法が巨石の蘇 力を表現できるものになると考え調査し た。また、建物上部には用いないこと、 地形に沿って利用することで、安定感を 担保する必要があるということがわかっ



飛び石、城郭の石垣、巨石文化、石庭、古墳の石など古来から日本人に伝わる石文 化について理解することで、親しまれる石建築の創造に寄与すると考えた。空間性 やヒトの感覚にどのように捉えられるのかという点において石建築を再考する。石 建築のイメージの無い日本において石建築をつくるということに挑戦するのに欠か せない作業である。



各2000年1月号から2018年7月号のうち37冊を除く、

632 冊より 263 の石建築事例を参照1.代表的な 38 事例

を個別に分析

設計方針はいまある石垣、技術を継承 すると共に、この石垣を再解釈していま ある石垣につなげ、新たな景観をつくり 出すこととした。



理師の大馬石の巨石の石積はここにしかない技術でありながら、存続の危機にある。 貴重な地域資産の存在をここで活かせないか検討する

3. 設計方針 ~もともとの外部風景を内部環境として活かす~

石積というコンテクスト にあったかのような人

を総合して導かれる石建築の再老の結果

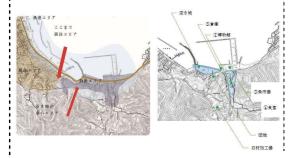


4.提案概要

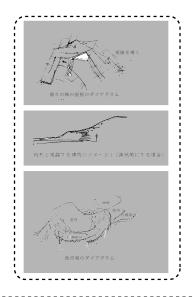
石の建築の可能性を求め、現代建築も含め、調査、分析した が、最終的にたどり着いたのはここ大島に根付く石積技術で

この提案では、この石の風景を拡張するように石積に機能と 造形を与え設計した。石積のランドスケープはうねるように流 れ、そのまま建築化していき、内と外の境界なく広がりを感じ させる。見え隠れする風景と一体化する建築、建築自体が風 景の一部となり、訪れた人は、巡り歩く中で内外の境界なく 宮窪の風景の中を歩く。

プログラムはすでにある魚市場、和船倉庫、博物館、集会所 の機能は保ちつつ、宿泊施設の不足の解消のための「コテー ジ」、仕舞われていた和船倉庫の可視化を含む「和船力 フェー、かつて使われていた「石風呂」を備えたシンボルの塔 を新たに設計した。



廃材を用いた石積のランドスケープは建物内部にめり 込むようにし、塔からコテージまで繋がる内部と外部 の連続的な動線を繋ぐ。しまなみ海道から大島に着い た観光客はこの自然景観を前に自動車等の乗り物は 降りてサイクリングや散歩を楽しむ。訪れた人は海沿 いを歩いていくと、石積に導かれ、そして各々の建物 が連続的に見えてきて、そこに立ち寄りながら大島の 魅力を味わうことになるのである。



5. ここにあり続ける ~ここにいる人と訪れる人~

このまちに点在する石積はやがて あたりまえになる。このまちの魅力 は石だけではない。この提案は、 人々をこの敷地としたところへ導く ものであると共に、このまちのす でにある魅力を浮かび上がらせる ものとなる。

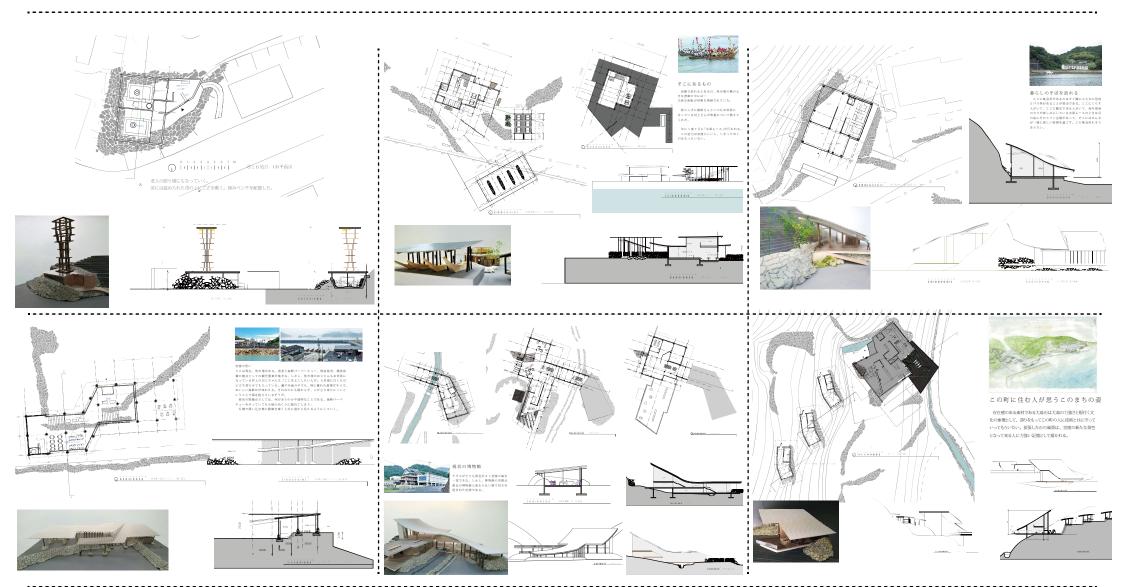
地域の人々にとっては、こころの拠 所になり、サイクリスト等の観光客 の記憶に残る大島らしい風景とな る。地元の人同士の集いも、地元 の人と観光客との交流も生まれる



6. 潮流のように流れ、渦潮のように囲う



7. 風景からランドスケープそして人間のスケールへ



8.これからの宮窪



この設計は、大島の宮窪でいつも共に活動をしてきた地域の方々の言葉から始まり、調査にもご協力いただきながら設計を進めて きた。この提案概要とプランをお見せすると「大変興味がある」との反応を頂き、調査にもご協力いただいた。これを是非現地に 還元したいと考えている。

存在感のある素材である大島石は大島の力強さと根付く文化の象徴として、誇りをもってこの町の人に技術と共に守っていってもらいたい。拡張した石の風景は、宮窪の新たな景色となって来る人に力強い記憶として描かれる。